

女学校創設期の服飾資料について

—学校法人広島女学院の場合—

栢 崎 久美子*

(2017年11月9日 受理)

A Study of the Costume of the Established Period of Girl's High Schools on the Case of HIROSIMA JOGAKUIN UNIVERSITY

Kumiko NARAZAKI*

1. はじめに

本研究は日本家政学会服飾史・服飾美学部会の特別シリーズ企画である「女学校創設期の服飾に関する貴重資料保管の現状調査とその情報分析・発信」の一端を担うものである。

2017年に創立131周年を迎えた広島女学院は広島市内にあるキリスト教主義に基づく教育を行う学校法人である。その高等教育機関である広島女学院大学は1949年に創立され広島に長く根ざし、地元の女子教育を担ってきた。創立から大学へと変化する中でその記録は女性の服飾に関する歴史的資料として有益なものと考えられる。本論ではその分析・考察を行うための資料の確認を展開していく。

2. 広島女学院大学の歴史

広島女学院大学は、1886（明治19）年に航海術を学び船乗りになることを志して渡米した砂本貞吉が、在米中キリストの福音に触れて洗礼を受け、神学を学び、帰国した際、信仰と女子教育への熱意によって創立された私塾「広島女学会」を創始としている。その後、広島初の女学校として、1887（明治20）年に「私立英和女学校」を広島区鉄砲屋町中の丁筋に開業し、梅花女学校を卒業した杉江田鶴を講師として雇用したり、私立広島英学校付属女生徒教場との合流が行われたりしながら、同年10月にアメリカ南メソヂスト監督教会から当時27歳だったナニ・B・ゲーンズを迎え、女学校としての体裁を整えていった。私立英和女学校は英学と和学を教授する学校

として発足し、1891（明治24）年から「広島英和女学校」として校名を改訂、1895（明治28）年の「高等女学校規定」を受け、1896（明治29）年には「私立広島女学校」と改称し、普通高等科を教育科、文科、理科と三科に分けたり、さらには裁縫専修科などを設置したりするなど改組を度々行いながら学校運営を行っている。学校組織としては幼稚園や小学校も付属のものがあつ、幼少期から20代前半までの乳幼児、児童、学生を育成していた。

3. 創設期の学生について

創設期の学生の年齢を知る手がかりとして、記録として残っている学則は1889（明治22）年以降の私立英和女学校からである。私立英和女学校は尋常小学校を卒業した10歳くらいの子から入学できる普通科（修学年限4年）と専修科^{注1)}（修学年限なし）と、普通科を卒業した女子がさらに学ぶ本科（修学年限2年）の6年制の学校として設置された。その1年後、予備科（修学年限2年）の上に、普通科（修学年限4年）、高等普通科（修学年限2年）に設置されている。広島英和女学校となつてからは6歳から入学できる付属小学校が修学年限4年で、その上に予備科（修学年限3年）、本科（修学年限3年）、高等普通科（修学年限2年）が設置され、予備科と同じ尋常小学校卒業後から入学できる専修科が設置されている。その後も科が細分化したり、年限の増減があつたりという学則変更を繰り返しているが入学できる年齢としては10歳からであることが確認できる。また、12歳から45歳の学生がおり、約半数が既婚者であつたとの記録もある^{注2)}。創立期の生徒数・卒業生数は一部の資料によると表1の通りであり、女学校最初の卒業生は3名であることがわかる。

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン・建築学科
准教授

表1 創立期の生徒数と卒業生数

年度	生徒数	卒業生数	年度	生徒数	卒業生数
1887 (M20)	30	—	1893 (M26)	30	—
1888 (M21)	23	—	1894 (M27)	22	5
1889 (M22)	13	—	1895 (M28)	34	—
1890 (M23)	28	—	1896 (M29)	42	3
1891 (M24)	66	3	1897 (M30)	50	4
1892 (M25)	50	—	1898 (M31)	75	6

（『広島女学院百年史』P. 42より引用）

しかし、『同窓会名簿』では広島英和女学校の最初の卒業生は「広島県統計書」をもとに作られた表1と同じ1891（明治24）年であるが、4名の名前が見える。第1期卒業生は西沢（錦織）ユキ、岡カズ、桑原（山田）ハツ、田中（奈古）ユタとされ、『広島女学院百年史』に収録されている別の記録によると陸軍士官の娘が2人、裁判官の娘が1人、宣教師の職員の娘が1人とされ、卒業後は全員が結婚をしたようである^{注3)}。創設期は広く新聞などで学生を募集しており、そのため在学生の年齢がまちまちであること、既婚者が半数以上であったこと、に加え、広島市内の中でも有力者に当たる家の子が通っていたこと、そして卒業後は結婚するものがほとんど、というのが創設期の学生の特徴であると言える。

4. 服飾資料分析

ここで、服飾資料についての確認であるが、学校法人広島女学院の歴史的資料は広島に原爆が落ちた際にはほぼ消失したが、多くの同窓生や関連のあった学校等により提供があり、現在では大学内にある歴史資料館にまとめられ、管理されている。今回そこに保存されている写真と同窓会名簿などを資料として、卒業写真や授業風景写真などに学生の服飾とその様子を確認することができた。

この当時の服飾に関する文献資料として、1895（明治28）年に教頭として着任した西村静一郎氏の『創立五拾周年記念誌』に寄稿された「思い浮かぶまゝ（抄）」では以下のような記述がみられる。

「そのころ職員間では、「卒業式には生徒に紋附の衣服を着せしむること然るべし」と云ふ説があり、是も亦當時

にはなか／＼厄介な問題であつた。他校では羽織衣服とも必ず紋服の事、洋傘丈は毛朱縹を許すなど、厳達せられてゐた所もあつたが、自分等は衣服の事は、父兄に於て充分多面的に子女の家庭教育を考慮せられ、女生徒自身も自発的に身嗜みをなすべき筈のものと考へて、当時の校則中生徒心得の中に「服装は質素なるべし。而して常に清潔なるを要す」と規定し、之を校舎の入口に告示したところが、二三日経つて、某女生徒が「父は質素とは身分不相応でなければよいのだと申しまして、これ迄着慣れて居る羽織を着せますから、御承認下さい。」と言つて来た。是はその当時広島名産の黄色の勝つた繭織の羽織を着てゐたのである。そこで更に衣服のみならず、弁当の如きも隣人に同情を以て善処すべしと注意した。尤も心持は自己の身分とか貧富とかばかりでなく、他を顧みて互助の精神を助長せんことを期したのであつた。」¹⁾

この内容から、すでに近隣の学校では紋付の衣服で卒業式に出るという礼服の考え方がすでに浸透していたことがうかがえ、同時に、私立広島女学院では、学生の家庭環境を配慮して一律にすることを良しとせず、また、キリスト教教育を同時に行っていたことから、周囲の学生に豪華な衣服を自慢するような態度は控え、質素と清潔を衣服に求めていたことがわかる。では、実際の女生徒の服装はどうだったのであろうか。

今回確認した資料のうち、卒業式などをまとめた写真資料を取り上げ、分析を行なったところ、最も古いものは1899（明治32）年に撮影されたと思われるものである（写真1-1）。この年の卒業生は同窓会名簿によると、高等科に1名（第3回）、裁縫専修科に4名（第1回）、高等女学部（本科）に4名（第6回）の9名である。高等科の1名は高等女学部（本科）を1897（明治30）年に卒業した学生で、前列の9名がそれにあたると考えられる。



写真1-1 1899（明治32）年に撮影された教師と学生

卒業式後の様子であり、女学生たちは手に卒業証書と思われる丸めた紙を持っている。服装は振りの長めの小袖を着用しているようであり、細かな柄などははっきりとはわからないが、後ろの教職員と思われる女性たちの服の色と比べると淡い色合いであると思われる。帯締め、帯揚げが見え、お太鼓結びをしていると考えられる。髪型は島田髷のような日本髪（写真1-2）の女性が数名、大きく頭頂部に髪を丸くまとめているだけに見える（写真1-3）女性が数名見受けられる。これは束髪と言われる髪型で1885（明治18）年ごろに提唱され、一般の女性にも受け入れられたものだと考えられる。履物は足袋をはき、こっぱり下駄か下駄をはいている様子が見える。



写真1-2 日本髪の卒業生（部分）



写真1-3 束髪の卒業生（部分）

次に古い写真資料は1902（明治35）年のものである（写真2）。同窓会名簿によると、この年に卒業したのは高等女学部4名（第9回）、保姆師範科2名（第2回）である。この写真が保管されていたアルバムに貼りつけられていたラベルには「生徒と教師」とあることから卒業式の写真とは一概には言えない。しかし、1903（明治36）年、1904（明治37）年に卒業写真として残されている写真資料と同じ場所で撮影されていることから、そうでない可能性も否定できない。男性及び外国人女性以外の女



写真2 1902（明治35）年に撮影された教師と学生

性が女学生なのか教員なのかを判別するのが難しいが、前列4名は女学生であるといってもよいだろう。2列目は右から4人目までが教員である可能性が高いが、判然としない。服飾の特徴を見ると、縞の太さはそれぞれであるが、柄入りの小袖を着ているもの、無地の明るめの小袖のものに分けることができる。襟元に柄がある襦袢、あるいは柄入りの半襟をつけたものを着ているものとそうでないものがあるのも注目すべき点である。また、東京などの女学校では1889（明22）年ごろから女学生の袴姿が一般的となったようであるが本学の場合は、1列目の4名と2列目の2名が袴姿のようである。そしてこの6名を卒業生であると考えれば自然である。お太鼓結びをしているであろう2名と不明の1名の3名は教員の可能性が考えられる。袴の着装に注目してみると、前でリボン結びにしているのが5名、残り1名は結び目が見えないので脇か後ろ、あるいは結んだものを内側に入れ込んでいると考えられる。髪型は全員が束髪であり、リボンがついていたり、頭頂部でねじってみたり、かんざしをしていたりとバリエーションが見られる。束髪については女学生だけでなく、女性全般に浸透している様子が見える。足元は残念ながらこの写真資料では確認することができなかった。

次の写真資料は1903（明治36）年に撮影された卒業式の写真である（写真3）。同窓会名簿によると、高等科2名（第4回）、裁縫専修科5名（第4回）、高等女学部10名（第10回）の17名が卒業生数である。1列目に10名が座り、2列目に女性外国人教員を除くと7名の女性が立っている。これらが女学生であると考えられる。

服飾の特徴を見ると小袖の着物で無地と縞のものがほとんどである。2列目左から2人目が網目文様であり、また、2列目左から3人目は柄入りの襦袢あるいは半襟を着用していると思われる。また、右から3人目は羽織を着ている様子が見える。袴をはいているものがほとんどであるが、結び目を中央にするか、左右に偏らせる



写真3 1903（明治36）年に撮影された教師と学生

か、また、正面からは見せない、というバリエーションが見られ興味深い点である。髪型は1列目の女学生は束髪がほとんどであるが、2列目の左から1人目と3人目は日本髪であるように思われる。履物は足袋をはいた上で、こっぴり下駄、下駄、草履らしきものをはいているように考えられ、統一した服装ではないことが指摘できる。

次の写真資料は1904（明治37）年に撮影されたものである（写真4）。同窓会名簿によると、裁縫専修科4名（第5回）、高等女学部19名（第11回）、保姆師範科6名（第3回）の計29名が卒業している。写真資料を見ると1列目に12名、2列目に11名、3列目の男性と女性外国人を除く4名の計27名が女学生であると考えられる。



写真4 1904（明治37）年に撮影された教師と学生

この写真の女学生の服飾を見ると小袖は縞、無地が優勢ではあるが、横縞、矢絣らしきものもみられる。また小紋らしきものも見られ、色も濃いもの、薄いものと全体的に華やかな印象である。袴も見える位置にいる女学生は全員着用しており、濃い色味が共通している。袴の結び目はこれまで同様、さまざまである。髪型は全員が束髪で、これまでのスタイルと大きな変化は見られない。履物については、確認できる女生徒が少ないが、足

袋に下駄かこっぴり下駄であると考えられる。

続いての資料はこれまでのものと異なり、1905（明治38）年の入学式のものであるとされている写真である（写真5-1）。1列目に25名、2列目に教員を除き23名、3列目に25名、4列目に25名、5列目に26名、6列目に19名の計143名の女性がみられる。文献資料において、1906（明治39）年の広島女学校の生徒数は242名とされ^{注4}、写真に写った女性のほとんどが新入生であると考えられる。



写真5-1 1905（明治38）年に撮影された教師と学生

服飾に注目してみると、立て襟のチャイナドレス風の衣服を着ている生徒と洋装だと思われる生徒が1名ずついる（写真5-2）。留学生などが当時いたという記録と照合することでこの写真の年代が明らかになるのではないかと考えられる。



写真5-2 和装ではない女学生（部分）

1～4列目の予備科と本科の学生と思われる10～12歳くらいと考えられる女子たちの服飾に着目すると明治時代以前では上流階級の外衣として知られる被布を着用しているものが何人か見受けられ（写真5-3）、着物の柄も縞や無地だけでなく、色味もさまざまである様子が見られる。

かがえる。紋付の着物や羽織（写真5-4）、中に着ている着物と異なった柄の羽織を着ているものも多く（写真5-5）、まだ私立広島女学校での学びを得ていないので、冒頭にあげた質素、清潔な服装という概念が浸透していない様子うかがえる。髪型はほとんど束髪であり、日本髪だと思われる女学生は1名だけであった。



写真5-3 被布を着る女学生（部分）



写真5-4 紋付の羽織を着る女学生（部分）



写真5-5 着物と柄違いの羽織を着る女学生（部分）

次の資料は1906（明治39）年に撮影されたものである（写真6）。同窓会名簿によると、高等科1名（第5回）、裁縫専修科6名（第7回）、高等女学部19名（第13回）、保姆師範科5名（第5回）の31名が卒業している。1列

目に8名がござを敷いた上に座り、2列目に椅子らしきものに座っていると考えられる12名、3列目に女性外国教員を除く11名、4列目に7名、5列目に3名、そして、資料右上に1名の計42名の女性が写っている。



写真6 1906（明治39）年に撮影された教師と学生

前の方が女学生であると考えられ、おおよそこれまでの卒業式の写真と同じ傾向の服飾を身に着けている。2列目左から5人目が日本髪で紋付の着物を着用しているようであり、彼女だけはハレの日であるという印象を与えているが、それ以外の女学生の服飾に変化はあまり見られない。

次の資料は1908（明治41）年に撮影された教師と学生の写真である（写真7）。同窓会名簿によると、裁縫専修科4名（第9回）、高等女学部15名（第15回）、保姆師範科5名（第6回）の24名が卒業している。写真資料を見ると1列目に8名、2列目に12名、3列目に9名、4列目に5名、6列目に1名の計35名の女性が写っている。



写真7 1908（明治41）年に撮影された教師と学生

1, 2列目が女学生だと考え服飾の特徴を見ると、これまでの特徴と大きな変化はない。紋付の着物の着用者が2列目以降増えているが、袴の着装方法はいまだ統一感のないままである。着物の色柄は濃い目の傾向が見受けられる。2列目右から2人目にチャイナドレスの女学

生がいるが、これはこの写真資料が保管されていたアルバムに貼られていたメモ書きによると留学生であるとされている^{注5)}。

次の資料は1909（明治42）年に撮影された卒業式の写真である（写真8-1）。これまで屋外で撮影していたものから屋内へと移っている。そののちは屋外での撮影に戻っているの、おそらくこれは天候の問題であったと考えられる。同窓会名簿によると、裁縫専修科13名（第10回）、高等女学部18名（第16回）、保姆師範科3名（第7回）の34名が卒業している。写真資料を見ると1列目に10名、2列目に11名、3列目に外国人教員を除く12名、4列目に外国人教員を除く8名、5列目に1名の計42名の女性が写っている。



写真8-1 1909（明治42）に撮影された教師と学生

1～3列目が女学生であると考え服飾の特徴を見ると、ほとんどが無地の着物で、紋付も数名見受けられる。この年初めて色紋付だと思われる着物の女学生も現れている（写真8-2）。



写真8-2 色紋付を着る女学生（部分）

これについては、1907（明治40）年ごろから、認可された高等女学校ではないことが本科入学生の減少に

つながり、また、1910年の『年報』で校長であるゲーンズが

「三年続けて高女部の入学者が減り、質も落ちました。」²⁾

と述べており、これは西村校主が女学生に求めていた質素と清潔が学生たちに伝わらなくなった、ということを表象した服飾表現に当たるのではないかと考えられる。それ以外に関する変化は大きくは見受けられない。

5. まとめと今後の展望

今回は1899（明治32）年から1909（明治42）年に撮影されたと考えられる写真資料を用いて、その服飾の分析を行った。今後はそれ以前の服飾がみられる資料及び大正時代まで資料を探し、地方の女学生の服飾に関する詳細な分析を継続していくつもりである。また、今回取り上げた写真資料以外にもまだ本学の資料館に眠っているものがあると考えられるため、丁寧な調査を行う予定である。

注

- 1) 現在でいう科目等履修生に相当する。
- 2) アルバ・コルバート・フロイドによる「日本メソヂスト教会の創設—南メソヂスト監督教会の見地から—」にその記事がみられると広島女学院百年史編集委員会『広島女学院百年史』（広島女学院百年史刊行委員会、1991年）に記述があるが、今後原本を確認する必要がある。
- 3) 『広島女学院百年史』（前述）より、ゲーンズの言葉として『ミッショナリーボイス』に所収されている「神の道に従って」に記録されている。
- 4) 『広島女学院百年史』P. 82に掲載されている表7 広島女学校（1896～1932）高等女学部（普通部）の生徒数の推移＜明治29～昭和7年＞による。ただし、これも今後原本を確認する必要がある。
- 5) ただし同窓会名簿にその名前がないことからこの年には卒業していないと考えられる。

引用文献一覧

- 1) 広島女学院百年史編集委員会、「資料編 四 語録・講演・手記」『広島女学院百年史』、広島女学院百年史刊行委員会、P. 717-P. 718、1991年
- 2) 1) と同じ、P. 82

写真・表出典一覧

写真1～8 広島女学院大学歴史資料館所蔵のものを著者がデータ化

表1 文中に記載